「ウッフッフッ！最高・・・！」

朝、渋々ながら、麻弥の掃除の手伝いをするために現場に向かっていた飛影。
その途中で、闇の中から聞こえてくる不気味な声で足が止まった。

（なんだ？）

首を傾げながらそちらへと進む飛影。

（霊気しか感じないが・・・？）

足早に曲がり角を曲がった時、飛影は見てしまった、

「むき出しの内臓！悲痛に叫ぶ顔、リアルな血管と筋肉の模様！グチャグチャのデロデロで・・・・素敵！素敵すぎ！最高にホラーだわぁ～！」

うふふふ、あははと、うっとりとした顔で、壁の悪趣味な模様を磨き上げている人間の姿。

「なんだ、あれ・・・！？」

瞳を大きくして、不意打ちで雪菜に出会った時のような顔で固まる飛影。

「ずっと、ああなのだ。」

その瞬間、気配と一緒に見慣れた男達が現れる。

「奇淋、時雨・・・。」
「今朝・・・朝１番で来た時には、すでにいて・・・」
「ああやって、楽しそうに、掃除をしてるんだ・・・。」
「あれが掃除か？」
「見ろ。あの娘が通った後・・・・後ろの方を見てみろ。」

時雨に言われて見れば、確かに麻弥が通った後はピカピカになっていた。
しかし、問題はそこではない。

「ああ・・・・グロテスクで、残酷で・・・・たまらない・・・！」

恍惚とした表情で、無邪気に目を輝かせながら掃除をするその姿。

（((こいつ、危ねぇ・・・・)))

ブラック・ナイトと良い勝負じゃねぇか。

そんな思いで、しばらく声がかけられない３人だった。
※
※
※
「貴様・・・あれを知りつつ、放置したのか？」
「人間を観察していただけだぜ？」
「あれで人間全部を、そうだと思うな！」
「じゃあ、桑原という奴か？」
「あれはもっと・・・あてにならん・・・！」

ロクな奴がいねぇ・・・！と頭を抱える姿に、また彼女は笑う。

「いいじゃねぇか・・・。恋する乙女ねぇ・・・俺は、そういうのがわからないからな。」
「・・・わからんのか？」
「ガラでもねぇしな。」

その答えに、何か言いたげな目をする飛影。それを知りながら、躯は知らん顔をする。

「きゃ～陣君の耳、可愛い！角！角も、可愛い～！」
「あははは！くすぐったいべ～」
「くっ・・・・！」

殺気を感じて麻弥を見れば、風使いと戯れる姿。
ただならぬ気を放っていたのは、以前自分を結界に閉じ込めた女だった。

「ねぇねぇ！私も風になりたい！だっこ！」
「しょうがねぇなぁ～ほれ。」
「え――――――――！？」

そのまま、お姫様抱っこをして宙に浮かぶ。

そんな２人に、持っていたお酒を落としながら叫ぶ瑠架。

「ちょっと麻弥！？酔いすぎよ！悪酔いするから、おやめなさい！」
「そうそう！飛翔術なら、俺の方が上だから、代わってやるぜ～？」
「むぅ！うっせぇ痩傑！もうオメーと戦った時のオラじゃねぇべ！」

そう言って、あっかんべーすると、麻弥を抱えて外へ飛び出す陣。

「いやぁ――――――！！陣～！？」
「「痩傑さん・・・！？」」

それを泣きながら見送る瑠架と、余計なことを言った男に詰め寄る小兎と樹里。

「わ、悪かった！追いかけてくる！」

逃げるように出て行く姿を笑い飛ばす一同。
飛影だけは、ため息しか出なかった。